

本学の歴史の中でも災害に際して義援金を募った
り、救済活動に参加をした事例があるが、ここでは、
一九三四（昭和九）年の室戸台風と東北地方の大冷害に
対する本学の義援金募集について紹介しよう。

三四年九月二十一日、室戸岬に上陸した台風が四国・
近畿・北陸・東北地方を襲い、三千人を超える死者・行
方不明者を出し、家屋の全壊流失四万戸を記録した（室
戸台風）。

各新聞はこの台風の被害の惨状を写真入りで次々に知
らせたが、これによって全国各地で罹災者救済のための
募金運動が開始され、新聞社などを通じて多くの義援金
が各被災県に贈られた。

また、同年秋は、東北地方にたいへんな冷害が起こっ
て、全国的な大凶作となり、特に東北六県では二百万余
の人口のうち約六割が救済を要する悲惨な状況になっ
ていた。被害状況が明らかになるにつれ、身売りや欠食児

童の増加などが問題となり、政府もその対応に力を入
れることになった。

このような中で、本学ではそれぞれの地方在住の学員
に学員会支部を通じて見舞をするとともに、それぞれの
被害者に応分の寄付をすることに決定した。そして、毎
年十一月に行われている本学創立記念祭の挙行を見合わ
せ、その費用の中から一、五〇〇円を関西地方、一、〇〇〇
円を東北地方にそれぞれ東京府社会課および内務省社会
局を通じて見舞金として寄贈することとした。

この間、学生たちも被害地救済運動に乗り出した。特
に本学東北県人会および九州県人会では、積極的に街頭
に出て運動し義援金を募集した。

『中央大学新聞』によれば、東北県人会は「東北凶
作地募金」として十月二十七〜二十九日および十一月
十・十一日の合計五日間、九州県人会は十月十七・十八日
の二日間、それぞれ街頭で募金活動を行った。その結果、

前者は一、三二五円八七銭、後者は二八五円四七銭の募
金を得て、それぞれ報知新聞社に寄託して被害地に贈っ
たのである。

また、『中央大学新聞』には法学部学生工藤定雄の「東
北凶作地 見学より帰りて」と題する報告が二号にわ
たって掲載されている。この中で工藤は困窮した農民の
姿や欠食児童の多さなど東北地方の惨状を報告すると
ともに、各地の学生救援会から送られた食料（芋）の配給



義援金の贈呈を伝える『中央大学新聞』記事
(1934年11月25日)

に感謝する人々の姿を伝えている。
なお、翌三五年四月二十一日には、台湾中北部で大地
震が起こり、死者三千人、家屋の全壊一万二、五〇〇戸
を記録したが、本学では台湾同窓会が中心となって学生
から義援金を募り、これに大学からの慰問金を合わせて
合計二〇九円八五銭が台湾総督府東京出張所を経由して
寄付されている。

ところで、大学生の災害救済活動というと、一九八九
（平成元）年十月のサンフランシスコ大地震の際、本学
の学生らが自費でボランティアとして渡米し、現地の救
世軍に合流して、献身的な救済活動を行ったことや九五
年の阪神淡路大地震にあたり、本学の法人はじめ学生部
や生協などが、それぞれ義援金を募集したり、罹災した
学生や受験生に対しさまざまな措置を講じたりしたこと
が思い起こされる。

大学や学生が各種の災害に際してできうることには限
界もあつたろうが、積極的に罹災者の救援にあたろうと
する姿勢は、昔も今も変わらないのかもしれない。